



アレクサンドル・メルニコフ (2024.3.13) © 藤本史昭

アレクサンドル・メルニコフ(ピアノ)

音楽の核心へ切り込む、唯一無二の個性 松本良一

トマシュ・リツテル(フォルテピアノ)

[特別寄稿] 川口成彦 「古楽」への想い、強く熱く…

クアルテット・インテグラ

過去と未来をつなぐ8月の蒼い空 片桐卓也

[Schedule 2025.5～8]

[Information]

2025/2026シーズン主催公演ラインナップ発表!

ランチタイムコンサート Vol.134 本堂竣哉(ピアノ)

久保田 巧 ヴァイオリンは歌う Vol.5



Alexander Melnikov

Shostakovich 24 Preludes and Fugues

音楽の核心へ切り込む、唯一無二の個性

松本良一

アレクサンドル・メルニコフは木訥な音楽家だ。飾り気がなく、口数は少なく、まっすぐに物事を捉え、音楽の本質に迫ろうとする。そして突然、炎のように燃え上がり、剛毅な響きで聴き手を驚かせる。博識に裏打ちされた沈思黙考と予測不可能な激しい気質の発露。凡庸な表現者の対極にあるミステリアスな存在だ。

ラフマニノフの《音の絵》Op.39の録音がある。作品の核心を捉えた堅牢な演奏は、スピヤトスラフ・リヒテルの実存的と言ってもいい名演に匹敵する。2011年に初めてインタビューした時、その感想を伝えると恥ずかしそうに頭をかいた。「光栄ですと素直に言えればいいのですが、それはあまりにもおそれ多い。かつてリヒテルの知己を得たことがありますが、私は『ピアノの巨人』と比べられるような存在ではありません」。そしてこう続けた。「でも、リヒテルの精神はどこかで私の音楽に継承されていると信じています」。

メルニコフのテクニクは目覚ましいものがある。だが、これ見よがしの超絶技巧とは無縁だ。2021年に4台の楽器を使ってC.P.E.バッハやモーツァルト、シューベルト、シュニトケなどを弾いたコンサートが思い出される(*1)。フォルテピアノを弾いても、現代のコンサートグランドを弾いても、そのタッチは常に適切にコントロールされ、あたたかい音色で過不足ない音量を奏でる。そこに唯一無二のファンタジーが宿る。

作曲家の自筆譜を入念に読み込み、作曲当時の楽器の特性を徹底的に調べ、歴史上の演奏スタイルの変遷を熟知した上でコンサートに臨む—そういうタイプの音楽家の演奏は、あまり面白くないことがある。勤勉の成果がテンペラメントの

炎を吹き消してしまうのだ。その陥穽^{かんせい}から逃れる方法は、一瞬毎に生まれては消えていく音に身を委ね、作曲家の靈感の閃きに耳を澄ますことだ。メルニコフにはそれができる。

2015年に再びインタビューした際、「歴史的楽器を用いた演奏こそが真正なものと言えるのか」が話題になった。メルニコフは意外なことに「楽器の選択はほんの入り口に過ぎない」と話した。「個々の作品にはとても多くのものが込められているので、それらを表現する可能性は無限にあります。大事なことは、作曲家が意図したものが何なのかをとことん追究することだと思う」と。

2022年に聴いたドビュッシーの《前奏曲集》第2集とベルリオーズ(リスト編)《幻想交響曲》は(*2)、その問いに対する答えのように感じられた。大切なことは、何が音楽の核心なのかを見極めようと努めることであり、時代の様式をなぞることではない。20世紀の印象主義の音の色彩や19世紀のロマン主義の奇怪な幻想は、21世紀を生きるメルニコフにとって共に等しい距離にある。そのニュートラルなアプローチは、本質的な意味で楽器を選ぶものではないのだろう。

ショスタコーヴィチの《24の前奏曲とフーガ》は、J.S.バッハの《24の前奏曲とフーガ》を20世紀の音楽イデオロムを用いて「翻案」した曲集だ。その初演者であるタチアナ・ニコラーエワの1987年の録音は老成した名演として語り継がれてきたが、メルニコフも全曲を2008～2009年に録音している。二つの録音は、世代の異なる二人のピアニストの音楽観の違いを顕わにする。バッハ弾きとして知られたニコラーエワは、これらの曲を厳格な形式に縁取られたある種のカノン

(正典)として解釈した。一方のメルニコフは……いや、それを語るよりも忘れられない思い出を話したい。

メルニコフはこの曲を過去に日本のリサイタルで取り上げたことがある。2012年のことだ。不覚にも録音で「予習」した上で聴きに出かけ、実際の演奏に接して完膚なきまでに打ちのめされてしまった。なぜなら、そこに予定調和的な美学は一つなく、ピアニストの指からはあらゆる種類の人間の心の動き—歓喜、悲嘆、愉悦、激高、諦念など—が刻一刻と姿形を変えて繰り出されたからだ。演奏上の瑕疵を取り除き、完璧に編集された録音からは聴き取れなかった「生の音楽」は、人生の皮肉や苛烈な暴力、労苦の果ての虚無、平和への強い希求といったものを恐るべき直截さで伝えていた。

時代の空気を敏感に察知して音楽に写し取ることができたショスタコーヴィチは、第2次世界大戦が終わって間もない頃の、喪失と安堵がない交ぜになったソ連社会の雰囲気や「音楽によるドキュメント」として残した。1924年生まれのコラーエワには生々し過ぎて躊躇したであろう戦禍の残響にも、1973年生まれのメルニコフはひるむことなく挑む。作品への敬意と透徹した解釈を備え、ピアノに向かう時は全身全霊で音楽に没入し、その激情に身を委ねる。だからこそ、作曲家が楽譜の行間に潜ませた音楽の核心に到達できるのだ。

あれから13年。50歳を過ぎたメルニコフが再び《24の前奏曲とフーガ》を日本で弾く。リヒテルのミステリアスな精神を受け継いだピアニストは、かつてこの曲について「あらゆる心の叫びが音楽に昇華されている」と語った。聴き手も覚悟して臨むべきだ。

(まつもと・りょういち／音楽ジャーナリスト)

*1: 2021年1月21日@TOPPANホール
*2: 2022年11月5日@TOPPANホール

アレクサンドル・メルニコフ(ピアノ) **発売**

2025年6月28日(土) 17:00

ショスタコーヴィチ: 24の前奏曲とフーガ Op.87

7,000円/U-25 3,500円 全席指定



QUARTET INTEGRA

過去と未来をつなぐ

ショウヘイ・オオタニと山火事だけがカリフォルニアの名物ではない。東海岸と並んで、カリフォルニア州は音楽教育の重要な拠点となっており、南カリフォルニア大学やUCLAの音楽学部などはその代表だが、さらにコルバーン・スクール(Colburn School)を付け加えたい。弦楽器のファカルティ(教授)にはマーティン・ビーヴァーやクライヴ・グリーンズミスといった元・東京クワルテットに在籍したメンバーも揃えている。現在、そのコルバーン・スクールでレジデンス・アーティストとして活躍をしているのがクワルテット・インテグラである。日本のみならず、アメリカの音楽祭、主要都市でのリサイタルも経験し、多くのアーティストとの共演も重ねている注目のグループである。

TOPPANホールでも2023年5月の〈生誕100年バースデー! リゲティに感謝を込めて〉の公演で初登場し、同じ年の〈トッパン

「古楽」への想い、強く熱く…

フォルテピアノ奏者 川口成彦

昨年8月にトマシュ・リッテルがブルージュ国際古楽コンクールで優勝したという大変嬉しいニュースが届きました。第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールでの優勝の後に、歴史あるブルージュのコンクールに参加することは色々プレッシャーもあったのではと想像しますが、その選択には彼の「古楽」というものへの熱意を私自身感じていました。

我々が生きる現代というのはピリオド楽器やピリオド奏法といったものが「特別すぎる何か」ではなくってきており、モダン楽器や古楽器の境目もなんとなく薄まってきているように思います。それゆえに演奏会やレコーディングという「現場」において、普段モダン楽器に特化しているような演奏家も気軽に古楽器に挑戦出来るような土壌が出来上がってきているでしょう。それは社会の流れとしてはとても好ましいものであることは間違いありません。しかし例えば、楽器だけがモーツァルトの時代の物になりながらも、演奏者の脳みそが完全21世紀状態では、「現代型モーツァルトfeat.古楽器」という新種が創造される方向に至ります。それは「古楽」に本来求められていたであろうものとは異質のもので、まさに「多様性」が謳われる現代を象徴する文化的産物です。

古楽器で昔の作品に真剣に取り組もうとする場合、楽器以上に演奏者の脳みそや精神が「ピリオド」状態に少しでもなれるかがかなり重要です。そしてそこが最大級に難しいところ…。様々なアカデミックなことは知らないより知っていた方がもちろん良いです。また、タイムスリップしなきゃ本来完全に知り得ないような昔の時代の感覚や演奏語法、音楽との向き合い方などなどに共感し、それらを表現しうるセンスも必要です。「表現しうる」と言っても、それが出来ているか否かはタイムマシンが発明されない限り分かりません。けれど表現したいと思う精神が、作品や作曲家へのリスペクトに繋がり、それこそが「古楽」の核となると私は考えています。

コンクールというものが若者のキャリア形成のために大きな影響力を持ってしまっている資本主義の現代社会では、若者は芸術のことだけを考えた思いを抱えながらも、どうしても「世に出る」ためのきっかけに対して意識を向けなければなりません。もちろんそのようなものとは無縁に生きる選択も出来ますが…。古楽器を用いた多様な音楽のあり方があふれている今日において、リッテルがブルージュのコンクールに挑戦したことは、「ショパンを古楽器で弾く」という社会的イメージだけではない「古楽器奏者」として自身の未来を強く思い描いていたからだと思います。「第1回ショパン国際ピリオド楽器コンクールの優勝者」にとどまらない「古楽器奏者トマシュ・リッテル」を自ら世界に提示出来たことは、何より彼の「古楽」への情熱が大前提となっているでしょう。

ところで私は、彼が2023年に国立ショパン研究所（NIFC）のレーベルからリリースしたCDの中のショパンの《スケルツォ第1番》を聴いた時に強い衝撃を受けました。使用楽器は

NIFCが所有する1819年のグラーフ（復元：ポール・マクナルティ）。ショパンがパリでの生活を始める前の時期にウィーン式（はねあげ式ハンマーアクション）のピアノで作曲されたと推測出来るこの作品は、未だウィーン式ピアノでの録音は稀少です。まさに作品像を描くに相応しい1820年ごろのウィーン式のピアノを使用したリッテルの録音はかなり貴重で、私自身グラーフの特性を活かし切った見事な演奏に衝撃を受けました。私も演奏会で実際使用したことがあるピアノだったので、「トマシュ、おぬしやりおるな…」という感情で嬉しさが込み上げました。まさに私が今まで出会ったことのない《スケルツォ第1番》の世界を彼が見せてくれました。

「古楽」の面白さはここにあります。聴き慣れた作品も全く新しいものとして生まれ、驚かされる特別な時間。しかも彼の場合は作品や作曲家へのリスペクトはもちろん、紛れもない演奏技術とセンスを伴って。

今年のTOPPANホールでのリッテルは、ショパンのバラード全曲を1843年のプレイエルでどのように料理するのか、当日演奏会に足を運べない私自身本当に本当に聴きたくて仕方ありません。2023年の浜離宮朝日ホールでの彼のショパン《24の前奏曲》を中心とした演奏も忘れられないゆえになおさら。

また前半のプログラムも大変興味深いです。ベートーヴェン第1番のソナタ、メンデルスゾーンの《無言歌集》の後に、メンデルスゾーンの《厳格な変奏曲》に行くのかと思いきや、まさかのベートーヴェンにまた戻ってハ短調の変奏曲！《厳格な変奏曲》と類似した精神性を伴うベートーヴェンのこの変奏曲が、無言歌の後にどのような感覚で演奏されるのかも注目してみると面白いかもしれません。

さらに今年TOPPANホールにベーゼンドルファー・ジャパンから貸し出されることとなった1909年製のModel250のベーゼンドルファーの登場も期待出来ます。弾く人によって様々な表情を見せる繊細な銘器は、リッテルと共にどのような音楽を奏でるのでしょうか。

最後になりますが、彼は音楽を離れた場面でも本当に魅力的で面白い人です。紳士的な品の良さと優しさを彼に会うといつも感じますが、ふと頭を見るとチャーミングな寝癖がよくあったりして、そんなナチュラルさゆえに一緒にいても落ち着きます。飛行機が大好きで、東京かどこかの都市でプラモデルを探しに行った話を嬉しそうにしてくれた彼の目は明らかに少年でした。音楽家としてだけでなく友人としても彼



に出会えたことは本当に喜ばしいことだったと、彼に会う度に思います。自然体なのに上品で紳士的なのは、同じ人間という生き物として羨ましい限りです(笑)。

トマシュ・リッテル (フォルテピアノ)
2025年6月25日 (水) 19:00
ベートーヴェン: ピアノ・ソナタ第1番 へ短調 Op.21
メンデルスゾーン: 無言歌集
第3巻より 変イ長調〈デュエット〉Op.38-6
第4巻より イ短調〈民謡〉Op.53-5
第6巻より ハ長調〈紡ぎ歌〉Op.67-4
第6巻より ロ短調〈羊飼いの嘆き〉Op.67-5
第5巻より ホ短調〈葬送行進曲〉Op.62-3
第6巻より 変ロ長調〈巡礼の歌〉Op.67-3
ベートーヴェン: 創作主題による32の変奏曲 ハ短調 WoO.80
* ヴィンテージ・ベーゼンドルファーまたはプレイエル使用

ショパン: バラード
第1番 ト短調 Op.23 / 第2番 へ長調 Op.38
第3番 変イ長調 Op.47 / 第4番 へ短調 Op.52
* 1843年製プレイエル (タカギクラヴィア所有) 使用

6,000円 / U-25 3,000円 全席指定
特別協賛: 東急建設株式会社
後援: 駐日ポーランド共和国大使館
協力: ポーランド広報文化センター

8月の蒼い空 片桐卓也

ホール23周年 バースデーコンサート」にも登場したことをご記憶の方も多かったろう。団体の名前の通り、まさにすべての要素がインテグレートされた、音楽的な集中力に満ちた演奏を常に繰り広げる弦楽四重奏団である。

私がこのクアルテットの存在を知ったのは、もう8年ほど前のことだろうか。サントリーホールが主宰する「室内楽アカデミー」の受講生としてオリジナル・メンバー4人で参加してきた。すでにその最初のワークショップの時点で、他の団体とは違うはっきりとした個性、音楽的な意志を強く感じさせる演奏であった。当時は別の名前で活動していたが。

私はその「室内楽アカデミー」の第1期生から数多くの若い弦楽四重奏団、ピアノ・トリオなどを聴いていたので、音楽的なレベルの高さだけでなく、弦楽四重奏を追い求めて行くという4人の意志

面でも要求の多い作品ばかりだが、それぞれの作品への深い共感と共に、時代への洞察も要求される作品群である。危機や緊張に感度の高かったアーティストたちに、時代はどんな芸術的な影響を与えただろうか、と想像してみることは、聴き手の私たちにとっても重要な意義を持つ。音楽は、そこで立ち止まって一緒に考えることを要求すると同時に、過去と未来を繋ぐ見えない時間の糸を自分の心の中に手繰りよせるチャンスを与えてくれるもの。そのチャンスを若い弦楽四重奏団と共にTOPPANホールで体験した後で、8月の空はどれだけ深く蒼いだろうか。あるいは別の色を見せているだろうか。クアルテット・インテグラが誘ってくれるその時間が、私には待ち遠しい。

(かたぎり・たくや／音楽ライター)

クアルテット・インテグラ II
2025年8月5日 (火) 19:00
三澤響果、菊野凜太郎 (ヴァイオリン)
山本一輝 (ヴィオラ) / パク・イェウン (チェロ)
バルトーク: 弦楽四重奏曲第2番 Sz.67 (1915-17)
ヤナーチェク: 弦楽四重奏曲第1番《クロイツェル・ソナタ》(1923)
ベルク: 抒情組曲 (1925-26)
5,500円 / U-25 2,500円 全席指定
特別協賛: 株式会社 竹中工務店

日時		公 演
5/	26 (月) 19:00	トーマス・ヘル(ピアノ) プロジェクト 2025 I リゲティ&バルトーク 山根一仁(ヴァイオリン)/谷口知聡(ピアノ)/竹原美歌、ルードヴィッグ・ニルソン(パーカッション)
	29 (木) 19:00	II J.S. バッハ&ショスタコーヴィチ 周防亮介(ヴァイオリン)/水野優也(チェロ) 竹原美歌、ルードヴィッグ・ニルソン、竹泉晴菜(パーカッション) 特別協賛：株式会社 竹中工務店
6/	25 (水) 19:00	トマシュ・リツテル(フォルテピアノ) 特別協賛：東急建設株式会社
	28 (土) 17:00	アレクサンドル・メルニコフ(ピアノ)
8/	5 (火) 19:00	クアルテット・インテグラ II 特別協賛：株式会社 竹中工務店

日時		公 演
〈ランチタイムコンサート〉 TOPPANホールが選んだ若手ホープによるミニ・コンサート		
6/	12 (木) 12:15	Vol.134 本堂峻哉(ピアノ) 重なり合う宇宙に響く「雨の木」 レイン・ツリー
	8 (金) 12:15	Vol.135 戸澤采紀(ヴァイオリン) 愛のカタチ
※開場は開演の30分前となります。 ※未就学児のご入場はご遠慮ください。なお、全主催公演で託児サービス[要予約・有料]をご利用いただけます。 ご利用の詳細については、各公演チラシをご確認ください。		
2025年4月中旬現在		

最新情報はオフィシャルWEBサイトでご案内しています ※WEBチケットもご利用いただけます

www.toppanhall.com

INFORMATION

2025/2026 主催公演ラインナップ発表!



2025年		
10/2 (木) 19:00	〈2025/26 シーズンオープニング 特別企画〉 TOPPANホール25周年 室内楽フェスティバル フォーレ四重奏団 アネット・ダッシュ(ソプラノ)/日下紗矢子(ヴァイオリン) ニルス・メンケマイヤー(ヴィオラ)/笹沼 樹(チェロ) 石川 滋(コントラバス)	6/26 発売
10/4 (土) 18:00		
10/5 (日) 18:00		
10/7 (火) 19:00		
10/8 (水) 19:00	〈ハーゲン プロジェクト フィナーレ〉 ハーゲン・クアルテット [全5公演 Part 1] イェルク・ヴィトマン(クラリネット) *第3夜のみ	★ 7/23 発売
11/11 (火) 19:00		
11/12 (水) 19:00		
11/13 (木) 19:00		
11/15 (土) 13:00	イェルク・ヴィトマン(クラリネット) mit 青木尚佳(ヴァイオリン)&笹沼 樹(チェロ)& 永野英樹(ピアノ)	9/17 発売
12/4 (木) 19:00	ジャン=クロード・ペヌティエ(ピアノ)	
12/10 (水) 19:00	キリル・ゲルシュタイン(ピアノ) × 藤田真央(ピアノ)	8/6 発売

※発売日は変更になる可能性があります。記載の発売日は単券の一般発売日です。
※★印はセット券をご用意しています。
※最新情報はオフィシャルWEBサイトをご確認ください。

2026年		
1/7 (水) 19:00	TOPPANホール ニューイヤーコンサート 2026 山根一仁(ヴァイオリン)/川口成彦、兼重稔宏(ピアノ) ほか	9/17 発売
2/9 (月) 19:00	ティル・フェルナー(ピアノ) mit Trio Rizzle&郷古 廉(ヴァイオリン)	10/22 発売
3/4 (水) 19:00	ベルリン古楽アカデミー 平崎真弓(ヴァイオリン/コンサートマスター)/クセニア・レフ ラー(オーボエ)/ラファエル・アルパーマン(チェンバロ)	
3/5 (木) 19:00	ゴートイエ・カプソン(チェロ)& フランク・ブラレイ(ピアノ)	10/29 発売
3/6 (金) 19:00		
3/20 (金・祝) 18:00	北村 陽(チェロ)	発売日 未定
4/4 (土) 18:00	アンナ・プロハスカ(ソプラノ) with ジョヴァンニ・アントニーニ指揮 イル・ジャルディーノ・アルモニコ	
5/12 (火) 19:00	レオンコロ弦楽四重奏団	
5/26 (火) 19:00	ニコラ・アルトシュテット(チェロ) イリア・グリンゴルツ、毛利文香(ヴァイオリン) 原 麻理子(ヴィオラ)/ヨナス・アホネン(ピアノ)	
5/29 (金) 18:30	トリオ・ヴァンダラー	
6/10 (水) 19:00	〈ハーゲン プロジェクト フィナーレ〉 ハーゲン・クアルテット [全5公演 Part 2]	
7月初旬		

表紙: アレクサンドル・メルニコフ

鬼才ぶりが存分に発揮された独自の世界観で、聴衆を圧倒・熱狂させるメルニコフ。チェンバロ、フォルテピアノ2台、スタインウェイを舞台上に並べ弾き分けた2021年1月の公演は、いまでも強く記憶に刻まれています。カーテンコールでは演奏中の厳しい表情から一変、はにかみながら客席に応えるチャミングな一面も。そのギャップもまた人を惹きつけてやみません。

編集後記

秋からの2025/26シーズンをついに発表しました。SNSでたくさんの反響をいただき、ありがとうございます。新シーズンは開館25周年のアニヴァーサリーシーズン。主催公演に欠かせない顔ぶれをはじめ、世界のトップアーティストから次代を担う注目の若手まで、いつも

に増して力をこめたラインナップをお届けすることに、いまから心沸き立つ思いです。大きな節目を迎えるホールの今後の歩み、さらにはベーゼンドルファー・ジャパン様から貸与される「1909年製ベーゼンドルファーModel250」のお披露目にも、どうぞご期待ください。(雪)

注目のホープ、その豊かな資質に触れる



数多の新しい才能をご紹介している〈ランチタイムコンサート〉。6月にスポットを当てるのは、ピアノの本堂峻哉。2024年4月、急遽開催された特別企画〈ベヌティエに愛をこめて〉にトップバッターで登場し、J.S. バッハ《トッカータ》で客席を魅了した若きバッハ弾きです。

今回も心酔するバッハを中心に、同じく心酔する小説家・大江健三郎の『「雨の木」を聴く女たち』の世界観を表現した、《武満—シューマン—バッハ—シューマン—武満》のシメトリカルなプログラムをお届けします。アーティスト本堂峻哉のすべてを注ぎ込む渾身のステージに、どうぞご期待ください。

なお、〈ベヌティエに愛をこめて〉公演は、TOPPANホールの公式YouTubeで配信中です。6月の公演を前に、こちらもあわせてご覧ください。

〈ランチタイムコンサート Vol.134〉

本堂峻哉 (ピアノ)

重なり合う宇宙に響く「雨の木」

2025年6月12日(木) 12:15

武満 徹: 雨の樹 素描

シューマン: 4つのフーガ Op.72 第1曲 ニ短調

J.S. バッハ: フーガの技法 BWV1080 第1曲

J.S. バッハ(ケンプ編): コラール「目覚めよ、と呼ぶ声あり」 BWV645

シューマン: 暁の歌 Op.133

武満 徹: 雨の樹 素描 II —オリヴィエ・メシアンの追憶に—

入場無料 (要予約 / お一人様2席まで)

受付期間: 2025/4/30 (水) ~ 5/22 (木)

お申し込み方法: ハガキ (抽選制 / 当選者のみ通知)

〒112-0005 東京都文京区水道1-3-3
TOPPANホールチケットセンター「ランチタイムコンサート Vol.134」受付係
(住所、氏名(フリガナ)、電話番号、希望席数を明記ください。)

色彩豊かなヴァイオリンの調べ

久保田巧の《ヴァイオリンは歌う》シリーズは、「いま自身が伝えたいこと、弾きたい曲」を発信していく場として、5年前にスタートしました。彼女の音楽家としての懐の大きさ、表現者としての鋭い感性を照射し、毎回多くの聴衆を魅了しています。

久保田自身が「第2の故郷」と語るウィーンの音楽を中心とした構成になるのかと思いきや、3回目以降は《椿姫》《カルメン》《エフゲニー・オネーギン》といったオペラを軸に、そこにまつわる様々な曲に挑み、“歌う楽器” ヴァイオリンと彼女の魅力の新たな一面を開示し驚かせてくれました。

シリーズ5回目の今回は「光と影」をテーマに、多様に変容する20世紀前半の世界を映し出すようなプログラムが届きました。この手の音楽を得意とする廻由美子を共演者に迎え、以前から得意としていたストラヴィンスキー《イタリヤ組曲》やピアソラ《ラ・گران・タンゴ》、珍しいレパートリーと思われるプーランク、ファリャ…。名手の巧みな技が描き出す色彩感あふれる世界をお楽しみください。



久保田 巧 ヴァイオリンは歌う vol.5 光と影

2025年6月14日(土) 15:00

廻 由美子(ピアノ)

ストラヴィンスキー: イタリヤ組曲

プーランク: ヴァイオリン・ソナタ

ファリャ(コハンスキ編): スペイン民謡組曲

ピアソラ: ル・グラン・タンゴ

全席指定: 5,500円

主催: KAJIMOTO

お問い合わせ: カジモト・イープラス 050-3185-6728

チケットのお申し込み: TOPPANホールチケットセンター